

第4分科会「里山と森林・農林業」

地域と共に生きる「なりわい」は成り立つか？

日時：2007年4月28日(土)13:30~16:30

場所：東金市 東金文化会館

参加者：45名

趣旨

先人の知恵を受け継ぎながら繰り返されてきたかつての暮らしは、自然に負荷をかけず持続可能な社会を形成していました。

このような環境と共生する仕事、暮らしが「なりわい」として成り立ちにくくなっています。

住宅建築でも農業でも「なりわい」的な小規模、少量生産はたちまち大資本に飲み込まれてしまい、守り手を失った森林や農地の荒廃がすすみます。

地域で仕事をし、暮らすことが環境を守る、そして経済的にも豊かになれるような地域循環型の「なりわい」は成立しないのでしょうか？

成立させるためにはどのような仕組みを作らなければならないのでしょうか？市民と行政、林業家、農業者が協力して、より良い地域づくりの道を考える討論会を行います。

内容

参加者 ・グループ「木と土の家」のメンバー

- ・ 林業家
- ・ 市民
- ・ さんむフォレストのメンバー

発表者 今関 貞夫 氏（東金市役所）

- ・ 情報を出し、情報を交換する必要。地域の環境が農業の営みの中で守られていることを知ってほしい。

発表者 鈴木 天 氏（農業）

- ・ 農業に魅力があった時代を取り戻したい。地域の農業者の人組みによって農村を再生し、特産品を作り出そうとしている。

発表者 本間 一夫 氏（さんむフォレスト）

- ・ 地域循環の考え方と住環境関連がもっと認識されても良い。地元の持っている力で風土の再生。

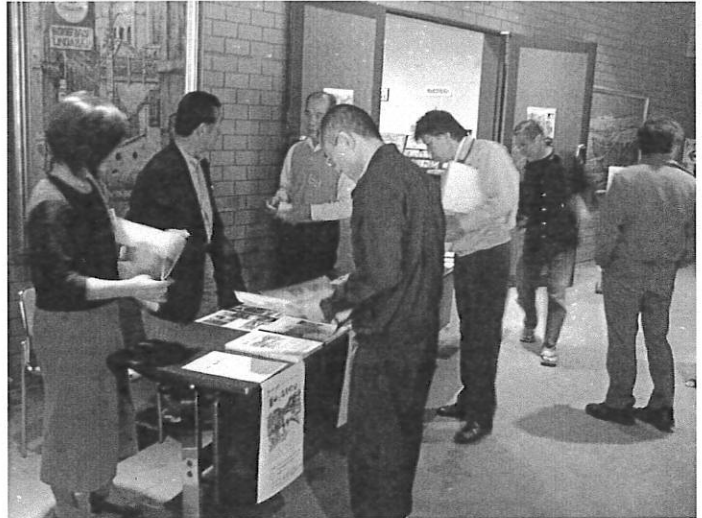
発表者 石井 充 氏（材木商、グループ「木と土の家」代表）

- ・ 地域循環型の住まいづくりを「なりわい」にする。仕事を通じて地域の再生に貢献する仕事集団としてのグループ「木と土の家」の試み。



結果

- ・地域で活動する人それぞれの役割を見つけ、人の心をどう組んでゆくかということ。
- ・「なりわい」と呼べる農業のあり方が、地域環境を保全してきた歴史と現状について、現在どのような施策がとられているのか？
- ・千葉県特産の山武杉で住まいづくりをする地域循環の仕組みが、この地域の自然の再生と地元林業の活性化に役立つということを市民に理解してもらう。



結論

今日では神社の周囲が広く照葉樹林に覆われているが、それは管理が停止されて以降、顕著になったものと新たな研究が小椋純一らによってなされている。

むら人達は鎮守の社に豊作と無事を祈ってきたが、神社に対する気持ちは、特定の神に対する深い宗教心というよりは、むら共同体社会への連帯の精神であったと考える。

また、むらの社会には、世代や性別毎に共通の願いをこめて行われるいくつかの講があった。

子どもたちの天神講、年寄りたちの念仏講など消滅したこれらの講のなかには、効率を優先しすぎた今日の社会において、人と人とのつながりや精神的な面では代償が必要となるものもあるのではなかろうか。

まとめ

- ・市民の消費行動がこれらの地域循環を支え、「なりわい」を成立させるということを理解してもらう。